

釧路巡検

- 日時 2006年9月3日(日)
- 集合場所 8:00 JR釧路駅前
- 巡検コース(貸切バス移動)
JR釧路駅前—千代の浦—白樺台—昆布森—入境学(地すべり地形)—昆布森—雪裡橋—岩保木水門(釧路川の河川改修)—細岡湿原展望台・大観望(昼食)—達古武沼—ヒルトップ(炭鉱展示館)—太平洋炭鉱選炭場—釧路港南埠頭—副港—JR釧路駅(解散)
- 参加者 22名
- 案内者 佐々木 巽・酒井 多加志
(北海道教育大学釧路校)

平成18年度北海道地理学会の巡検は、9月3日(日)に釧路駅前からバスに乗って北大通りを南下するところから始まった。

以下に主要な見学地について解説する。

■北大通り

北大通りはJR釧路駅から釧路川に架かる幣舞橋(釧路川)に至るメインストリートである。北大通りは釧路市のCBDを南北に貫いているが、近年他の地方都市と同様にCBDの空洞化が著しく、北大通りに面したところでさえ空き店舗や駐車場、空地が目立つ。2006(平成18)年8月20日には釧路市唯一のデパートである丸井今井釧路店が閉店し、ますます賑わいが薄れている。それにかわって、ホテルは建設ラッシュで、この2年間に東横イン、ラスティングホテル、スーパーホテルが開業し、現在はラビスタ釧路川、ルートインが建設中である。これは企業が釧路の支店や営業所を閉鎖したことによるところが大きく、釧路にとって望ましいこととはいえない。

■幣舞橋とMOO

現在の幣舞橋は1976(昭和51)年に完成したもので、5代目に当たる。札幌の豊平橋、旭川の旭橋と共に北海道の三大名橋の一つに数えられる。長さ124m、幅33mで、橋の欄干には春夏秋冬を表す「道東の四季像」が設置されている。初代の幣舞橋は1900(明治33)年に架橋されたが、橋の長さは203mであり、現在のものよりも長い。幣舞橋の袂にはMOOが位置する。MOOはMarine Our Oasisの意で、1989(平成元)年に釧路港のウォーターフロント開発の核となる施設としてオープンした。第三セクター「釧路河畔開発公社」が事業主体で、当初は西武百貨店グループ

が参加していた。オープン当初は注目され、全国から視察が訪れたが、現在はかつての活気はなく、施設内は空き店舗が目立つ。赤字経営が続いており、毎年、市議会で問題になっている。現在のMOOは市が所有し、釧路河畔開発公社が運営している。

■釧路町海岸部の難読地名

釧路町海岸部の集落には難読地名のものが多い。これらの地名はアイヌ語起源のものである。具体的な集落名としては、嬰寄別(アッチョロベツ:エゾネギの群生している沢)、来止臥(キトウシ:行者ニンニクの群生しているところ)、浦雲泊(ポントマリ:船がかりが出来る小さな入り江)、冬窓床(ブイマ:海の中に立っている岩)、入境学(ニコマナイ:川尻に流木の集まる川)、初無敵(ソソテキ:沼のような静かな浦)などがある。これらの集落は昆布採取を中心とした漁業集落で、集落の背後には昆布の干場が広がっている。

■入境学の地すべり地形

厚岸町から釧路町にかけての海岸には、地すべり地形が数カ所見られる。これらの地すべりは「第三紀層地すべり」といわれるもので、古第三系の春採夾炭層中の凝灰岩が滑り面となって、その上にある天寧礫岩層が地すべりを起こしたもので、現在は幅500m、長さ約1kmに及ぶ馬蹄形をした凹地となっている。

入境学(汐見)入り口から海側に進むと、見晴らしのきくカーブにかかる。ここから西方を眺めると、正面の壁からぐるりと山側をへて足もとまで、大きな馬蹄形の輪郭をもつ凹地になっているのがわかる。これが地すべりの範囲でこの凹地の中には小山がいくつもある。これらは移動土塊とよばれるもので、海側の平坦な小山は海に向かって押し出しているように見える。現在は埋め立てられている小山のあいだの溝状凹地は、地すべりが移動した時に移動土塊が引き裂かれて陥没したところで、一部は水がたまって池になっている。

■岩保木水門と釧路川放水路

かつての釧路川は阿寒川と合流していた。釧路川河口部は港として利用されていたが、港は主として阿寒川の運ぶ土砂によりたびたび埋没するとともに、下流域は洪水が頻繁に発生した。そこで、1917(大正6)年に阿寒川切替工事が行われ、現在の新釧路川の河口部から太平洋の注ぐことになった。にもかかわらず、

1920（大正9）年に釧路で大水害が発生し、浸水域は釧路駅にまで達した。そこで新たに釧路川放水路を建設することになった。なお、この洪水で阿寒川の水が大楽毛川に流れ込み、大楽毛川の河口が阿寒川の河口となり、現在に至っている。

釧路川放水路は岩保で釧路川を分岐し、旧阿寒川の河口に至るもので、1921（大正10）年に着工、1930（昭和5）年に完成した。分岐点には木材の流送のための岩保木水門が設置されたが、1931（昭和6）年に鋼網本線全通し、木材輸送は鉄道が担ったため、水門は一度も開いていない。なお、1990（平成2）年に新岩保木水門が完成している。

ところで、釧路川の名称は放水路完成後は、放水路を新釧路川、従来の釧路川を釧路川と呼んでいたが、1967（昭和42）年に釧路川が一級河川に指定されると、放水路を釧路川、従来の釧路川を旧釧路川と呼ぶようになった。これは上流の水が岩保木水門に遮られ、従来の釧路川には流れていないことによる。しかし、市民により名称復帰運動が行われたこともあり、2001（平成13）年に釧路川は新釧路川、旧釧路川は釧路川となった。

■釧路湿原

釧路支庁の釧路市から釧路町・標茶町・鶴居村にかけて広がる湿地。東西の最大幅は約25km、南北は約36km、面積は21,440ha。湿原の主要部は標高10m以下で、海跡湖であるシラルト口湖、塘路湖、達古武沼が湿原東縁の段丘に深く湾入するように位置している。また段丘崖に沿うようにして釧路川が流れ、支流の久著呂川、雪裡川などが湿原の中央を南～南南東に流れて本流に合流している。このことは湿原全体が東に沈下するような地盤運動を示唆している。

釧路平野には縄文時代に海進によって古釧路湾が形成されていた。その後湾口に砂礫州が発達して潟湖が形成された。この潟湖内の水は引き続いて起こった海退により、汽水から淡水へと変化するとともに、土砂や植物の埋積によって湿原となった。現在はヨシ、スゲ、ハンノキなどが生育する低層湿原となっている。湿原の表面から1～4mは泥炭層で、その下には砂や礫を挟んで、古釧路湾や潟湖の時代に生息していた貝類の殻が厚く堆積している。

湿原内を流れ下る釧路川は度々洪水を起こしたが、大正9年（1920）の大洪水を契機として、同10年から洪水防止と釧路港への土砂の流入を防ぐことを目的に、現釧路町イワボッケから現釧路市新富士町地先に至る延長12kmの人工河川（現新釧路川）が開削された（昭和5年通水）。現在釧路湿原では開発よりも保全する方向での取り組みが積極的に行われている（釧路

川治水史）。昭和55年（1980）湿原中央部の7,863haが日本で最初のラムサール条約指定地域となった。また同62年には釧路湿原国立公園として指定された。湿原には国指定特別天然記念物のタンチョウ、氷河期の遺存種とされているキタサンショウウオなど、貴重な動植物が多数生息あるいは繁茂している。また国立公園の指定とともに観光客が増加した。湿原の西縁にある台地上に釧路湿原展望台（釧路市北斗）、東縁の台地上には湿原大観望（釧路町細岡）があり、ともに雄大な湿原の景色を楽しむことができる。

■太平洋炭砒、釧路コールマイン

釧路コールマインは日本唯一の坑内掘りの炭砒である。釧路コールマインの前身である太平洋炭砒は2002（平成14）年1月30日に閉山、翌日釧路コールマインが引き継いだ。釧路コールマインの事業は採炭事業、炭鉱技術海外移転事業（ベトナム、中国、インドネシアなどから研修生受け入れ）、一般廃棄物中間処理事業（粗大ゴミ処理センター）3つから成る。釧路コールマインの出炭量は年間約70万トン強あり、これは太平洋炭砒時の3分の1に当たる。採掘現場は太平洋炭砒時は沖合約10kmまで坑道が広がっていたが、現在は沖合約3km、海底下320mのところで採掘を行っている。2006年度で採掘終了予定であるが、あと5年間の採掘延長を申請している（注：申請が認められ、5年間延長されることになった）。なお、巡検では炭鉱関連施設（選炭工場、坑口、鉄道、貯炭場、南埠頭、ベルトコンベアー、グリ捨て場）をバスから見学するとともに、新旧地形図により地域変化を解説した。

■釧路港副港

釧路港東港区の西端に位置する副港は1960（昭和35）年に完成した漁港で、当時は東洋一の規模を誇っていた。釧路は1979（昭和54）年から13年間、水揚げ量日本一であったが、その後、イワシの漁獲量減少により漁獲量一位の座は他の漁港に譲った。2004（平成16）年現在の漁獲量は155,782トンで、焼津、銚子に次ぐ。魚種ではスケトウダラが41.7%、イワシが20.6%、サンマが14.8%を占める。

午後4時には釧路駅に戻り、解散した。その後参加者の一部による懇親会が市内の居酒屋で開かれ大いに親交を深めた。

（酒井・佐々木記）

会 報

2006年度

1. 春季大会記事

2006年度春季大会は、6月25日(日)に北海学園大学豊平キャンパス4号館にて開催された。以下の通り、一般研究発表、講演会および総会が行われた(参加者29名)。

●一般研究発表(10:00~12:30)

川村真也(北海道大学大学院文学研究科・院)・橋本雄一(北海道大学大学院文学研究科)：北海道の都市部における高齢者人口分布の推移

森永陽一朗(北海道大学大学院文学研究科・院)：札幌市における生涯スポーツ環境の空間分析

沼田尚也(北海道大学大学院文学研究科・院)：都市内部地域における性・年齢階級別人口移動に関する地理学的研究—札幌市における事例—

金森正郎(北海道札幌東高校)：大学入試における立地論問題出題の影響—問題集解説の分析を通して—

氷見山清子(北海道大学大学院環境科学院・院)：1970年以降の新潟県の農業的土地利用の変化

長南史男・近藤巧(北海道大大学院農学研究院)・棧敷孝浩(北海道大大学院農学研究院・研究生)・駒木泰(札幌大学経済学部)・丸山明・小糸健太郎(酪農学園大学酪農学部)・土井時久(雪印乳業(株)酪農総合研究所)：北海道生乳生産の地域別シミュレーション分析

なお、一般研究発表については、本号に発表要旨を掲載している。

●講演会(13:30~15:00)

岡孝雄(北海道立地質研究所)：北海道の平野と盆地の成立過程

●総会(15:10~16:00)

・2005年度事業報告・決算報告・監査報告について

庶務委員会より2005年度事業報告と決算報告、会計監査より監査報告がそれぞれあり、いずれも承認された。事業報告の内容は、次に挙げる5項目だった。1)機関誌「北海道地理」第80号を刊行、2)春季大会の開催、3)秋季大会の開催、4)「私たちの身のまわりの環境地図作品展」への協賛。なお、2005年度末の会員数は、顧問5名、普通会员141名、学生会員29名であった。

2005年度決算報告(カッコ内は予算額)：

(収入)

会費	477,700(393,750)
雑収入	172,000(115,000)
＜広告料	60,000(100,000)＞
＜会誌販売	66,000(10,000)＞
＜寄付金	0(5,000)＞
＜その他	46,000(0)＞
前年度繰越金	219,494(219,494)
計	868,494(728,244)

※会費収納率86.1%。雑収入の「その他」は秋季大会参加費。

(支出)

会誌印刷費	299,812(380,000)
事務費	3,147(20,000)
通信費	60,805(70,000)
＜学会誌郵送	13,550(25,000)＞
＜大会関係	16,790(25,000)＞
＜その他	30,465(20,000)＞
謝礼	5,000(10,000)
秋季大会補助	55,072(10,000)
会議費	0(10,000)
予備費	3,500(228,244)
次年度繰越金	441,158(0)
計	868,494(728,244)

※会誌印刷費は第80号分。

・2006年度事業計画案・予算案について

庶務委員会より2006年度事業計画が提案され、承認された。事業計画案の内容は、次に挙げる5項目だった。

1) 機関誌「北海道地理」第81号を刊行、2) 春季大会の開催、3) 秋季大会の開催、4) 例会の開催、5) 「私たちの身のまわりの環境地図作品展」への協賛。これに伴う予算案が庶務委員会より提案・説明され、承認された。

2006年度予算案：

(収入)

会費	386,000
雑収入	75,000
＜広告料	60,000＞
＜会誌販売	10,000＞

＜寄付金	5,000＞
前年度繰越金	441,158
計	902,158

※会費収納率70%にて計算。

(支出)

会誌印刷費	380,000
事務費	10,000
通信費	55,000
＜学会誌郵送	15,000＞
＜大会関係	25,000＞
＜その他	15,000＞
謝礼	10,000
秋季大会補助	40,000
会議費	10,000
予備費	397,158
計	902,158

※会誌印刷費は第81号分。

・会誌名称の変更について

編集委員会より、会誌名称変更に関するアンケート結果が報告された。これを踏まえて討議した結果、会誌名称を変更することに決定した。なお、新名称については、改めて幹事会において検討した上で、会員の意向も取り入れながら決定することにした。

2. 秋季大会記事

2006年度秋季大会として、9月3日(日)に巡検を実施した。参加者は22名だった。コースは次の通り。JR釧路

駅前—千代の浦—白樺台(公営住宅の再生)—昆布森—入境学(地すべり地形)—昆布森漁港(干場)—雪裡橋—岩保木水門(釧路川の河川改修)—細岡湿原展望台・大観望(昼食)—達古武沼—ヒルトップ(炭鉱展示館)—太平洋炭鉱選炭場—南埠頭—副港—JR釧路駅前。詳細については、本号掲載の巡検報告を参照されたい。

3. その他

・第16回「私たちの身のまわりの環境地図作品展」(環境地図教育学会主催)における優秀作品に対して、北海道地理学会会長賞を授与した。

「都会の自然～植木鉢マップ～」

筑波大学附属駒場中学校1年 日下 歩

「簾MAP」

埼玉県立浦和高等学校1年 山田 悠太

・会員消息(会誌80号掲載以降、敬称略)

入会：今野実土里(北海道教育大学札幌校・院)、杉山悠然(北海道大学大学院環境科学院・院)、山田佳奈子(北海道大学大学院文学研究科・院)、森 淳子(北海道大学低温科学研究所)、清水伊織(トップツアー株式会社)、堀江祐圭(北海道大学大学院情報科学研究科・院)、長谷川航(北海道大学大学院環境科学院・院)、畠山拓(北海道教育大学大学院教育学研究科・院)、小畑貴博(北海道大学大学院環境科学院・院)

退会：板本賢一、大久保雅弘、久保 修、黒沢恵美子、長谷川健吾、依田明実、横平 弘、大澤照雄